

平成30年1月定例教育委員会会議録

1. 開会及び閉会に関する事項

(1) 日 時 平成30年1月9日（火曜日）

開 会 15時30分

閉 会 16時45分

(2) 場 所 直方市役所 8階 808会議室

2. 出席者及び欠席委員の氏名

(1) 出席者

教育長 田岡洋一

委 員 山内 健、 委 員 中村敬子

委 員 澁谷昌樹、 委 員 清永智教

3. 会議に出席した者の氏名

(1) 事務局

教 育 部 長 秋吉恭子

教育総務係長 天野浩輔、学校教育課長 小島啓一、

学校教育課管理主事 右田清二、こども育成課長 熊井康之、

家庭支援係長 塩田礼子、文化・スポーツ推進課長 山部福美、

社会教育係長 壇 泰寛

(2) 書 記

教育総務課長 安部静子

4. 会議式次第

○教育長（田岡洋一）

皆さん、こんにちは。1月定例教育委員会を始めさせていただきます。

最初に教育長報告ということで説明をさせていただきます。座って説明をさせていただきます。教育委員会行事報告というプリントをごらんいただきたいんですが、12月12日が12月定例教育委員会の開催日でした。

翌日の13日に小中一貫教育推進本部会議が開催をされまして、直方市の小中一貫教育推進方針の改定案、あるいは29年度の研究のまとめの様式等について、協議を行いました。

12月17日の日曜日、ユメニティで福岡県PTA連合会北九州ブロック研修会に参加をいたしました。この研修会では植木小学校のPTAが地域、保護者、学校が連携したPTA活動というテーマで植木の文化祭の取り組みを実践発表されました。その後の講演会では、KBCのテレビでよく出ています徳永礼子さんが、「礼子しっかり生きています」という演題で大変ユニークな講演をされて、座が盛り上がりました。

12月18日、臨時教育委員会ということで、中村新教育委員さんの紹介、教育長職務代理者の指名、成人式の案内等について、御連絡をいたしました。

同じ18日に臨時校長会ということで、これも中村新教育委員さんの紹介、そしてその後、平成30年度直方市公立学校教職員の人事異動方針等についての伝達を行いました。

12月19日、不祥事防止対策検討委員会ということで、直方市の教職員の中で、今年度不祥事等心配な教員についての情報交換会を行いました。

12月21日、第6回教育フォーラム実行委員会ですが、ここではいろんな意見が出たんですが、最終的に教育フォーラムは予算の関係もございしますが、一応本年度で最後とする。そして、今後は必要に応じて開催をしようという決定をいたしました。

12月24日がハート・トゥ・ハート第九コンサートということで、これも恒例のコンサートで、ことしで8回目ということでございました。ユメニティ大ホールがほぼ満員になるような盛況でした。

28日が仕事納め式。

1月になりまして、1月4日仕事始め式。その後、そこに書いてございせんが、直方市職員永年勤続者表彰式ということで、20年あるいは30年勤続者の表彰式にそのまま続けて参加をいたしました。

1月7日が直方市成人式ということで教育委員の皆様方にも御参加をいただき、お世話になりました。

本日が1月定例教育委員会。この後は5時から直方商工会議所で、新春挨拶会にちょっと顔を出しまして、その後、きょうは新任の教育委員さんの歓迎会ということになっております。

裏をごらんください。

今後の予定につきまして、後で変わる部分もあるかと思いますが、1月10日、明日、北九州教育事務所教育論文表彰式並びに教育論文の発表会。

1月11日、定例校長会議。

1月12日、部落解放同盟直方市協議会2018年新年旗開き。

1月14日、消防出初め式。午後がライオンズクラブの書き初め表彰式に参加をすることになっております。

18日、定例教育長会議。

24日、賀詞交歓会。これは直方市議会の議員さんとの賀詞交歓会ということで予定が入っております。

26日、文化財防火デーの消防訓練。訓練は西徳寺で行うと聞いております。同じ日に、小中一貫教育推進本部会。そして、教育委員会の新年会がエクセレントガーデン迎賓館で行なわれる予定になっております。

後でこれも出てきますが、1月27日は上頓野学童クラブ施設落成式。

28日、直鞍一周駅伝競走大会の開会式。

2月1日、定例校長会議。

2日、そこに書いてございませんが、福岡県教育センター研究発表会に参加をする予定にしております。

2月13日、定例教育長会議。同じ日の午後に2月定例教育委員会を予定しております。

以上で、教育長の報告を終わらせていただきます。

何か質問等ございませんでしょうか。

議案1件あり

時限非会議録のため、平成30年6月15日まで非公開

それでは次に協議事項に入ってまいります。

卒業式告辞についてということで、学校教育課長お願いします。

○学校教育課長（小島啓一）

資料２－１、２－２と、Ａ３の横版があると思います。資料２－１が小学校、２－２が中学校です。２－１の小学校につきましては、題材が男子体操の内村航平選手。資料２－２の中学校の題材が、私もあまり知りませんでしたけれども、結構有名な方でして、南谷真鈴さん。７大陸最高峰の登山を制覇したという方で現在は早稲田大学の生徒さん、在籍中の人でありまして、テレビでもよく取り扱われている方だそうです。題材については、一応私たち学校教育課で何度か推敲しながらつくりました。こういう形で提案いたしますがどうでしょうか。

○教育長（田岡洋一）

事前にもうお読みいただいていると思いますが、次が２月１３日の定例教育委員会。３月（の委員会）は６日。最終的には３月６日ぐらいまでかかるかと思いますが、きょうはまず取り上げた人物等について。概ねこういう人物でいいのかどうか、それともやっぱりモデルを変えて書き直したほうがいいのか、あるいはこの人物でいいとしても、どうしてもここだけはこういう書き方はおかしいんじゃないかとか、大卒の意見をお伺いして進めていくのが一番効率的かなと思うんですが。どうでしょうか。御自由に御発言ください。

○学校教育課長（小島啓一）

小学校のほうからでもしありましたら、御意見いただければ。

○山内委員

内村航平選手については賛成なんですけど、小学校の子供にとってもよく知った名前だろうから身近でいいだろうね。「北九州生まれ」と書いてあるのは、確かに北九州生まれなんやけど、印象として北九州出身の選手かねって定着してるかどうかやね。長崎県佐世保市出身ということが定着してるので、多分これは北九州というより、君たちと身近なところで生まれた人なんよと親しみを持たせるために書かせたと思うんだけど、これだけで終わったらちょっと姑息な感じがするんですよね。「北九州市で生まれ、長崎県佐世保市で育った」にしたほうが公平というか平等のような気がします。

○学校教育課長（小島啓一）

入れるか、そもそも削除するかですね。

○山内委員

多分、子供に身近に感じさせるために入れたんやろうから、これを生かすとするなら。

○学校教育課長（小島啓一）

長崎を入れる。

○山内委員

それと、去年僕が最後に言った意見で、地域の方にお礼を言ったほうがいいよねというところで、最後のところにつけ加えられてると思うんです。読むとくどいんよね。何でくどいかと思えば、短いんよね。「また・・・で心よりお礼申し上げます」で、地域の方のお礼というのは、卒業式に来ている人だけではない。来てない方々で6年間お世話になった方々に対しても公の場でお礼を申し上げるべきものであって、来ている人だけに限定しているから文が短くなって、何かお礼が3回繰り返されているような印象があるので、これは「御臨席賜りました地域の皆様方、並びに6年間お世話になった地域の方々。」少し長くしてやったほうがいいのかなという印象ですね。

内村選手はいいと思います。

○教育長（田岡洋一）

題材としてはいいのではなかろうかということですね。

○中村委員

1 ついいですか。

○教育長（田岡洋一）

どうぞ。

○中村委員

小学生がこの長い文を聞けるのでしょうか。結構、長いなと思ったんですけども、どうなんでしょう。

○澁谷委員

同意見です。

○学校教育課長（小島啓一）

意外と式場で読まれると教育委員会のほうは短いんですよ。校長のほうが長いです。もう終わったのという感じが結構あるんですよ。読んだら意外と。

○中村委員

これ短いんですか。

○教育長（田岡洋一）

大体、例年の長さと同じぐらいだと思います。

○学校教育課長（小島啓一）

少し短い。

○中村委員

中学校のほうがすっきりしてたようなイメージがあったので。

○学校教育課長（小島啓一）

そうですか。

中学校のほうが大分長いと思います。

○中村委員

長いんですね。これ。行間が。

○学校教育課長（小島啓一）

そうです。行間が（違うので）中学校のほうが長いです。やっぱり。

○教育長（田岡洋一）

中学校のほうが長い。

○中村委員

そうなんですね。行間で違ったんですね。

もう1つ、小学生に「信念」という言葉がかなり使われていたんですけども、理解していますかね。

○学校教育課長（小島啓一）

石松主任指導主事が書きましたので、6年生でも十分わかるという前提で書いてると思います。

○中村委員

はい。わかりました。

○教育長（田岡洋一）

リオの五輪って去年ですかね。

○山内委員

一昨年です。

○教育長（田岡洋一）

そうですね。ここ昨年になってますよね。

ちょっと古いかなと思ったんですか。そこは大丈夫ですかね。昨年となってるところが一昨年。

○中村委員

そうですね。年がかわったんで。

○澁谷委員

冬季オリンピックが終わった後やしね。

題材を出すのはちょっと期間的に無理かなと思って。

○山内委員

そういうのは内村航平ではなくて、次の選手、名前忘れたけど。

○学校教育課長（小島啓一）

ひねり王子、白井健三。

○山内委員

女子の村上のほうが新しいよね。あれ去年やないかな。

○中村委員

そうですね。でも、内村航平の背中を追って、あそこまでいったという。

○山内委員

確かにそうね。

○教育長（田岡洋一）

世界選手権は去年あったんですよ。

○中村委員

そうですね。

○山内委員

それをひっくり返してしまったら、何か根底から書き直さないといけないような、これは大変な作業やね。

ぎりぎりセーフやないけど。

○学校教育課長（小島啓一）

本当にレアというのが、対象というわけでもないのかなと思うんですね。そういうと次の中学校に非常にハードルを上げてしまいますけども、内村航平は十分みんな知ってるから。

○教育長（田岡洋一）

担当の指導主事が、それを一番気にしてるんです。がらっとひっくり返るのが、また一から書き直さないといけないので。

○山内委員

ですよ。この時期にね。

慌てて書くと失敗するもんね。

○澁谷委員

題材としては問題ないんじゃないですかね。

○教育長（田岡洋一）

よろしいですか。では、細かい点はまたこの後時間があれば御意見いただくか、次でいただくということで。

中学校のほうに参りたいと思います。

○学校教育課長（小島啓一）

その前に1ついいですか。先にPRしていいですか。

○教育長（田岡洋一）

どうぞ。

○学校教育課長（小島啓一）

確かに南谷真鈴ということが一般的かという話もあったんです。私もこれで知ったんですけども、いろいろ調べると、ちょうど同じ時期にあるニュース番組で、思い出に残る云々というところでベスト100の中に入ってたんですね。池上彰さんも言ってました。この人のことをよく持ちあげられてましたけれども、もっと広く言うと、歴史上の人物、その人のこと知ってなくても、その人の例えば生き方とか、おさえとか、そういうところが子どもたちのためになればいいのかなと思って、一応これで進めましたけれども、確かに一般的でないと言われればそうかもしれないと思います。今から彼女もっとマスコミに出てくると思います。今、注目の人らしいです。

○中村委員

子どもは知っていますよ。うちの子は知っていました。

○学校教育課長（小島啓一）

そうですか。

○中村委員

この前、熊とも闘ったよね、この子って言ってました。

○山内委員

そうですか。

○学校教育課長（小島啓一）

いわゆるお金かかるじゃないですか。今から持ちあげられる、取りざたされるというのは、家が裕福でもなく、18歳のときにインターネットでスポンサーを募ってる。そういう努力をしながらしたらしいです。そういうところがよくクローズアップされてました。

○澁谷委員

そういうことが文にない。

○学校教育課長（小島啓一）

それは必要かなと。正直思いますけれども。

○澁谷委員

この人の特集番組見ましたけれども、目標に向かってやっていってる。達成するために自分でこういうふうに使っていたというのがテレビのテーマみたいな感じだったです。

あんまりしつこく書くとあれやから、この程度でいいかなと。

○山内委員

今の聞いて、言えなくなってしまった。

○学校教育課長（小島啓一）

先手打ってしもうた。

○山内委員

言いたかったのは、この人のこと僕は知らない、正直な話。中学生がこの人の話を聞いたとき、まず距離を感じる。そうすると以下の中でああそうなんやねって子どもを引きずり込みきらないといかん、文章で。そうすると、これから以下の文を練りに練らなくちゃだめやと思う。後半の文章にかかっていると思う。この題材でいいんよ。いいんやけど、知らんね、その人。そうなんやね。子どもを促せるような文に変えていかないとだめってことです。そこにかかってくると。

○学校教育課長（小島啓一）

足りないところです。

○山内委員

足りないとか言わんけど。もうちょっと練ったほうがいいかなと。

○澁谷委員

逆に言えば、真鈴さんのというよりも、どういうことをやったかというのをわからなくて名前がポンと出てくると、知らない人が聞いたら、だんだん話聞いていくとその人だったんですねと思うんだけど、名前知らない人だっ

たら最初言った名前もう忘れてるんですね。だから、結局、南谷さんはこう
いうことをやった南谷さんというのを、最初にポンと強い文面になると、
「エベレスト、キリマンジャロ、マッキンリーと世界最高峰を制覇した南谷
さん。」前置きが長くなりますけれども、逆に前置きあってもいいんじゃない
かなと思って。

○中村委員

そうですね。字面で「最年少世界」って言ったときには、字面で見たらわ
かるけれど、聞いたときに一瞬わからないかもしれませんね。

○澁谷委員

僕なんかとてもじゃないけど残りません。

○中村委員

聞いたときと、見たときと違うような気がします。

○澁谷委員

家庭は裕福じゃなかったけど、目標達成のために自分でお金を集めてチャ
レンジした南谷さん。で、やったのはエベレスト。意味合い的には。
僕は題材としては好きです。いいんです。

○学校教育課長（小島啓一）

構成を少し練り直す。引用を先に出して。

○澁谷委員

認知度はどうなのかなというところの疑問を持っただけで、題材は好きな
んですよ。

○中村委員

女性で冒険家ってなったときに、えって思いますよね。そういうふうにつ
えられなかったんですよね。この字面だけを見たときは。冒険家というより
も、最高峰登頂者って言ったときにぴんときるかなと思います。

○学校教育課長（小島啓一）

構成やね。

○清永委員

この幅でやるから、この紙面の中でいじらんといかんという（制約が）。

○山内委員

難しいよね。

○清永委員

本当は頑張ってスポンサー集めて、自分で道を開いたというところをもうちょっとクローズアップしてほしいなと思うけど。それが最後のまとめにつながるなと思いますけど、そこを広げるとどっかを削ると言われると、やっぱりこのままなのかな。この紙の中だけで納めるのなら。

○澁谷委員

難しい。読んでいて。

○清永委員

子どもがすごいなと思うのは、山に登ったのもそうやけど、その資金を自分で集めたという。そこまでやったんだというのに引き込まれるんじゃないかなという気がしたんです。そういうような可能性があるよ、君たちも。ってどうかなという感じが受けたんですけども。

○山内委員

ここで言ったことがうまく執筆者に伝わらないと、執筆者は混乱するだけだもんね。

○清永委員

いっそのこと、石松先生にここへ来てもらったほうが。

○学校教育課長（小島啓一）

あれを（録音テープを）聞いてもらいます。

○山内委員

余計わからなかったりして。混乱したら書けなくなるもんね。何を大事にしたらいいのか。

○澁谷委員

言ってる本人もわからない。

○清永委員

2つありますもんね。偉業も言いたい。やった過程も言いたい。

○中村委員

そうですね。

○教育長（田岡洋一）

小学校も中学校も基本的にテーマというか、この人を扱うということでは、御了承いただいたということで。あと、工夫次第ですよ。もうちょっとどうしてもこのとこの表現だけ変えたほうがいいとか、お気づきになった点とかあれば、もうちょっとお伺いしたいと思います。

○山内委員

話戻って、「数々の困難を乗り越え、偉業をなし遂げた21歳の女性のお話をしましょう」という書き出しで始めて、渋谷委員が言われたように、具体的な達成した名前を後半に持ってくるとかね。これだと距離を感じるよね。

○教育長（田岡洋一）

いきなりポンと南谷さんを出すんじゃなくて。

○渋谷委員

数々の苦難を乗り越えて。

○山内委員

苦難とは何か、偉業とは何かが後で出てくる。いいのかもしれないね。言っているのでしょうか。

「中学校の皆さんも幾つかの山の名前を御存じではないでしょうか。」「御存じ」という表現は使わなくてもいいような気がする。中学卒業生に。ちょっと違う気がする。御存じではないでしょうか。

○教育長（田岡洋一）

通常どおり、知っているのではないのでしょうか。という感じですか。

○渋谷委員

なくてもいいと思う。

○山内委員

ある事件とあるんよね。「ある事件をきっかけに」。そして、その何行か後に、「社会に出る」。そして、「母親になる等の条件から」ってあるね。これがわからなくなる。クエスチョンマークが灯って、ずっとクエスチョンマークを引きずりながらずっと最後までいくような感じで。ある事件とは何なのか。17歳のとき、ある事件をきっかけに、自分を見詰めるためにいつかエベレストに登ろうとある、ある事件の説明が何もないんよね。ずっと。これ何。と思いながら、次の段落にいくと、社会に出る母親になるための条件か。これは何の条件と、ここでまたクエスチョンが灯るよね。きっかけになった大きな出来事やろうけどね。

○教育長（田岡洋一）

後半部分の「社会に出る」「母親になる」というのは、そんな年になる前に、19歳までにという意味ですよ。

○山内委員

そういう意味ですか。

○中村委員

それが私もよくわからなかったです。

○清永委員

山内先生が言われたように、バッサリないでもいいんじゃないかな。それでもちょっと違うことで何かぼやけるといえるか、ぼさりなくして、ここであつた、その前に協力を求めるとか、スポンサーとか、そこが終わったと思ったら事件。ここは何かちょっと無いでも。

○澁谷委員

目指そうという動機があつたというのは、動機がなんだったのかというのがぼやけてる。

○山内委員

書いてる人は素直に忠実に書かないかんと。全く触れなかったらいけないやろうということで、文字数の関係から、ある事件という表現で追い込まし

たんやろうけど、聞く人読む人にとったら、それは余り重要な要素じゃないかもしれないね。だからバツサリ切って、切ってもずっと通るなら。切れるもんなら切ったほうがいいんじゃないかと思うけどね。伝えたい本質にそれない限り。

それから、ビンソン・マシフ登頂ってわかる？「ビンソン・マシフ登頂をきっかけに」。「最高峰登頂は、エベレスト登頂のためトレーニングとして登ったビンソン・マシフ登頂。」これさらっと出てきてるでしょ。これどこにあって、どんな山なんって全くわからなくて。初めて聞くような名前で、これの出し方とか考えたほうがいいのかなくて。

○教育長（田岡洋一）

ビンソン・マシフ登頂。これも多分、忠実にその事実に触れなくちゃいけないと書いたんやろうと思いますね。

最初のほうに出てくる山の名前も最近変わってるんですよ。

みんながなじみのあるほうで残して書いてるんだと思います。2、3年前です。チョモランマとかね。それから、マッキンリーも今そう言わないみたいです。ただ最初全部並べていたんですね。聞いたこともない山の名前も含めてですね。なじみのある分だけ書いときゃいいんじゃないかと。

○清永委員

これなくてもいいと思うんです。せっかくなので、「七大陸最高峰登頂しようという南谷さんの挑戦は決して順調なものでもありませんでした。」きっかけにならなくても、七大陸、全部に登頂するというだけでも通じるやないですか。余り細かい地理に詳しくなかったら、わけがわからんのと、もっとシンプルでもいいんじゃないかなと思いました。

○教育長（田岡洋一）

具体的な山の名前はそんなの出さなくてもいいと。

○清永委員

それは、実はこの文の中で余り重要なことじゃないんじゃないかなと。名前を出してまで。それより、困難の中で、命の危険とかにさらされながら、全部登りましたという。エベレスト1個やったけど、七大陸を制覇したというわけではないんでしょうか。

○澁谷委員

(紙面が) 限られてる。

○清永委員

書けって言われたら、書ききれませんがね。

○澁谷委員

削れるところは削って。

○山内委員

次の段落で、「女性という理由からつらい思いをしたりしました」っていう表現があるよね。これはどういう内容なんだろう。

○教育長（田岡洋一）

ここは、私が聞いた範囲では、やっぱり男性から襲われたり何とかしたと。そういうことがあったんで、ぼうっとした書き方にしたということでした。

○学校教育課長（小島啓一）

標高5, 000メートルぐらいのところで、現地の案内人いるじゃないですか。時々、疲労とか不安で恐怖に駆られて、異常な行動をしたりする人が出てくるらしいですね。その中で、男性に襲われたというのは、多分そのことだろうと、今教育長言われたように。

○山内委員

これは要るんかね。

○澁谷委員

なくてもいいと思います。

○学校教育課長（小島啓一）

一通り、与えられたのを並べたという感じがしますよね。

○山内委員

「命の危険に何度もさらされた」、その中に広く包含されてるんじゃないかね。

○澁谷委員

最初の文章に女性と書いてないから、男性か女性かわからない。

○中村委員

日本人最年少としか書いてない。

○澁谷委員

これ、ぱっと名前だけだと男かもしれない。

○清永委員

真鈴さんね。

○中村委員

どっちでもいそうな。

○山内委員

事実はできるだけ伝えないといけないけれど、卒業式というお祝いの中で、教育委員会が言う言葉の中で、「女性という理由からつらい思いをした」とかというような、マイナスの要素はあえて出す必要性があるのかどうかだね。

○澁谷委員

なくてもいいと思います。

○山内委員

そうやって書くほうも大変やもんね。これだけ言われたら、書くほう大変やね。

○教育長（田岡洋一）

この後のスケジュールは、告辞に関しては、きょう、いただいた御意見をもとにもう一遍このテーマで少し書き直して、そして2月定例教育委員会に向けての事前の資料ということで送るという形になるわけですかね。間はもう1回なくていいですかね。間があってもなかなか動いていただくわけにはいかないですかね。

もう少し、御意見伺いしましょうか。

○学校教育課長（小島啓一）

大方まとめると、最後に何を伝えたいかをまず決めたときに、余計なもの

は削いで、盛り上がっていくような内容で流れる。その前に、過去ずっと行なっていた形に則って、さっといってるんですよ。まず、人を紹介する。卒業生に対して、この人の話しますよ。こういう人ですよ。これからこういうこと頑張ってるね。皆さんありがとう。っていう、いわゆる定石できたわけですよ。だから、もう1回まとめると、何が言いたいかを絞る。それまでに余興は削いで、盛り上がってくる過程をつくる。そして、最初にぽっとその人の名前でこうしましょうではなくて、どんな大きなことをしたかという掴みをここに持ってきて、年齢なり、お金は自分でこうやって稼いで、目標達成したんだよっていう流れに変えるということですね。大まかにまとめると。

○教育長（田岡洋一）

中学校の告辞のほうが、何を言いたいのかというのが小学校に比べてはつきりしないんですよ。

○清永委員

だから、こう思うんでしょうね。何となくぼやっとするというのは。

○教育長（田岡洋一）

小学校のほうは、夢や目標を定め、それを達成する強い信念と努力というようなことで言ってるんでしょうけど、こっちは何か自分が最初に聞いたとき、エベレストに何で挑戦するか、エベレストに登ると本当に自分のためなのかよくわからない。

○澁谷委員

登るという動機が伝わらないから。文章が、まとまってこない。なぜこの人がエベレストに登ろうとしたか、なにか強い思いがあったと思うんです。それがないから。

○清永委員

そうですね。17歳のときに登るんですからね。

○澁谷委員

10代の女の子ですね。僕たちから見たら。その子が何でエベレストに。普通登ると思わないもん。登るという強い動機があったと思うんです。それがあればもう少し。

○学校教育課長（小島啓一）

では、今回の教育委員会までに皆さんの御意見を網羅して、ちょっとつくり直します。そのときの結果見て、読んでもらう必要があれば、郵送でも何でもするようにして。ありがとうございました。

○教育長（田岡洋一）

告辞についてはよろしいですか。

次は、卒業式についてということで、学校教育課お願いします。

○学校教育課長（小島啓一）

これは、どういうことかということ、山内委員からありました。もう随行は要らんのじゃないか、何かあったら携帯電話でも、委員会で待機しておけば済むだろうという話がありましたので、それでよければそれでいきます。その確認をということだと思います。

随行です。

○教育長（田岡洋一）

なくしましょうか。

○清永委員

携帯番号で連絡取れるから、ひとりで行っても大丈夫じゃないかという。

○教育長（田岡洋一）

中村委員さんは初めてなので、やっぱり随行1人行った方がいいと思うんですけど。

○中村委員

はい。卒業式に出るんですね。私も。壇上の上で話すんですね。告辞を読むんですね。

○教育長（田岡洋一）

私も知らずに失敗したんですけども、行ったら普通その学校の教頭さんが、ここここは出番で、こういうふうにしてくださいと説明するんですけども、私最初三中に行ったとき、何にも説明なくて、高校の卒業式みたいに、告辞を読むっていうのはわかってるんですけども、記念品を渡すっていうのが何にも知らされてなかったし、高校はそんなことないんですよ。卒業式、逆

に生徒が記念品を学校に寄附するわけで。だから、記念品を渡すってなったときに、じっと座ってたんですね。そしたら、隣のPTA会長さんが教育長さんですって教えてもらって、慌てて上がっていったんです。

○山内委員

普通、言いますけどね。進行係が前もって。

○教育長（田岡洋一）

その時なかったですね。

○中村委員

それはどきどきしますね。

○教育長（田岡洋一）

普通は、告辞が終わってからおりなくていいですよ。次が記念品贈呈ですから、そのまゝいてくださいとか。学校によっては一遍おりてくださいとかいろいろあるみたいですけど。

○学校教育課長（小島啓一）

普通、言うんですよね。

○山内委員

普通は。

○学校教育課長（小島啓一）

ということで、中村委員は初めてなんで、多分彼（管理主事）が随行すると思います。当日は議会のときだから、私たち動けないので。

○中村委員

教えていただけるのだったら大丈夫ですよ。

○学校教育課長（小島啓一）

教えます。上がり方から、おり方まで。

○山内委員

随行は基本的にはないと。初めての方はあるけど。そのとき、緊急事態が

起こった時、どこに連絡入れるかというのを私たちに知らせておいてもらったら。

○学校教育課長（小島啓一）
次回の教育委員会まで。

○山内委員
よろしくお願いします。

○教育長（田岡洋一）
それでは次に平成30年度施策要綱について。お願いします。

○教育総務課長（安部静子）
お手元に資料3でお届けしている分でございます。これは毎年練り直して、書き換えを行っております。今、見え消しで朱書のところを新しく書き加えるなり、訂正させていただいたところでございます。4課まとめて、大きく変えてますのは、余り項目が去年は多過ぎたので、少し削いで、重点項目という意味合いのもので書こうということで、今回コンパクトにしたつもりでございますが、ごらんいただきまして、御意見があれば伺います。

○教育長（田岡洋一）
御意見どうぞ。

○山内委員
じゃあ、いいですか。まず、表紙めくったところですが、赤い部分。「その活動の拠点となる」その活動とは、何を指しているのかというのが、何の活動、何を受けているのか、今いちわからないと感じました。それから同じところで、「子どもの命を守る」「地域の避難場所としての機能を備える」こうくると、「快適な学習環境を整備する」と揃えるのが妥当かと、いいんじゃないかと思います。その活動というのが読んでいてわからなくて、多分、上の身につけさせる取り組みを連携して推進していく、その取り組みの次にでしょ。多分そうじゃないかな。活動ではなくて。取り組みのほうが行政としては、すんなりいくのかなって。私の意見です。
次にいってもいいですか。

○教育長（田岡洋一）

今の取り組みか活動かわかりませんが、その赤字の2行前の「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を身につけさせる取り組みを学校、家庭、地域がって書いてあるんですね。だから、その次のところで、その取り組みを拠点とあるから、学校に絞っていいわけですかね。

○山内委員

ひっかかるでしょ。僕もひっかかったんです。そうか。学校が拠点なのかなってというのがね。拠点という表現がなじまないですよ。だから、活動のほうがいいんじゃないですか。そこは考えてもらって。

○教育長（田岡洋一）

そうですね。また検討してみます。ほかにどうぞ。

○山内委員

先にいってもいいですか。

○教育長（田岡洋一）

どうぞ。

○山内委員

6 ページの前文の最後。「また、中学校区の単位とした小中一貫教育は第2期を迎え、新たに指定・委嘱し、その充実を図ります。」新たに指定・委嘱しというのは、何を指定・委嘱するかというのは明確に書かれていないので、それを書いたほうがいいと思います。

それから、質問やけど、その下、中間報告会は見え消し線で消してあるけど、今年は中間報告はありませんよという意味なのか、もうしないということなんですか。

○学校教育課長（小島啓一）

1 期の中で中間報告があったんですけども、2 期からはありませんので、平成30年度からはなくなりました。

○山内委員

4 つ目の○。小学校高学年への、5、6 年生に向けた音楽の専科教員の配置。これ何か文章おかしくないかね。多分、何か入れ込んで調整してないんだろうねって感じ。

○学校教育課長（小島啓一）

入れ込んだんですよ。今まで体育と音楽という形だったので。

○山内委員

小学校高学年生は5、6年生だけでしょ。

○教育部長（秋吉恭子）

ダブってる感じ。

○学校教育課長（小島啓一）

高学年消しましょうか。

○清永委員

これ最初、体育か音楽が中学校の教員の乗り入れ授業だという話を聞いたと思うんですが、いつの間に中学校の現役の教員じゃない方で、専科のという話に変わったんですか。もともと中学校の先生が小学校に来て、中1ギャップをなくすという話だったと僕は思ってたんですよ。だから、中学校の現役の先生がくることによって、中学校に上がったときに、顔なじみの先生がいるから、中1ギャップがなくなるんだって、私は受けとめてたんですが、専科の先生だったらちょっとそこからずれてきてるような気がするんですが。

○教育長（田岡洋一）

私も最初そう聞いてました。中学校側が専門の体育、音楽の先生を派遣して、その補充を講師が中学校で教えることになっていて、中学校側から言ったら逆転してるんじゃないかと。専門の先生が確かなテクニックを持った先生が小学校に行って、その後にということがありましたし、講師の確保が難しかったんですかね。

○右田管理主事

そうですね。一番はやっぱり中学校が回らない。

○清永委員

コマ数が増えちゃう。

○右田管理主事

コマ数というか、非常勤の先生が現場に残って、本来力を持った先生が出ますので、生徒指導上とか教科の関係上回らないというのが一番です。

○学校教育課長（小島啓一）

清永委員が言われたようなことから始まったわけですよ。ところが、ちょうど小中一貫教育の発表会もありまして、そこに例えば二中校区の小学校6年生のみんな集まって、合同で合唱したりしたことがありまして、そうすると音楽の指導がとても成果を生むということで、音楽でいこうとなったわけですね。そこでちょうど中学校の音楽の教員2人の退職が出たわけですよ。二中校区の山下先生。一中校区の小島先生が。で、退職したけれども中学校に籍を置いて、そこを拠点として、小学校に教えに行こうねということで今、半分中学校の教員が専科ということと、半分乗り入れ授業というのが残った状態でやってるんです。そういう形になってるんです。

○清永委員

じゃあ、もともと体育とか、音楽といていたのが、形が変わってきて。

○学校教育課長（小島啓一）

音楽だけになって、しかもさっきも言いましたように、正規が小学校にいて、空いたところに中学校が本当に経験のない講師を入れたときに、中学校の授業が成立しなくなったというところで、退職が出たので、両方兼ね合いながら、今残っています。

○清永委員

変わってますね。

○学校教育課長（小島啓一）

半分半分の状況なんです。結局、専科という言葉が一番合ってるかなと。一線を退いてるので、乗り入れではなくて。今までは小学校の担任と一緒にあったけれども、もうその授業やってもらおうとなったので、専科という言葉に変わってきた。

○清永委員

わかりました。

○教育長（田岡洋一）

今の文言に関しては、高学年をとるか、5、6年生をとるかどっちかしかないですね。かぶってるから。

○学校教育課長（小島啓一）

「小学校5、6年生に向けた」というふうにしようと思います。

○教育長（田岡洋一）

続けて、どうぞ。気がつかれた点。

○山内委員

質問ですが、7ページのスクールソーシャルワーカーと何カ所か消してあるけど、スクールソーシャルワーカーの制度をやめたということですか。

○学校教育課長（小島啓一）

ことし、スクールソーシャルワーカーが入りませんでした。籍はあったんだけども。入らなかった理由は、人材がいなかったということで、ハローワークを通してやってたんですけども、一応5人応募があったんです。だけど、ただのパート的な気持ちで来られてる方が3人おられて、これはやっぱりこの仕事をするには、無理だろうと。あと2人は、うちの就業条件が合わなくて辞退されたんです。多分、このままいくと非常勤という形でのスクールソーシャルワーカーは見つからないだろうということで、来年度に向けて、職員の人事構成を見直して、今調整しているのは、生徒指導担当の非常勤指導主事を入れて、そしてこども育成課の児童相談員と兼ね合いながら、スクールソーシャルワーカー的な仕事もしながら、1つの指導主事、生徒指導担当指導主事も全ていこうということで配置替えと言いますか、スクールソーシャルワーカーではなくて、生徒指導担当主事を入れるということに変わったので、ソーシャルワーカーを削除しました。

○山内委員

今いちよくわからなかった。

○中村委員

その指導主事の方はソーシャルワーカー的なことができる方なんですか。

○教育部長（秋吉恭子）

生徒指導担当の非常勤なんですけども、指導主事。非常勤職員を1人置く

ということと合わせて、療育の見地を持った職員。これは正規の職員なんですけど、1名別に配置しようということです。その方でスクールソーシャルワーカー的な仕事もしていただくということで、人員からすると強化されるようになります。先ほど言いましたように、非常勤のソーシャルワーカーというのはなかなか見つからないので、内部から職員として育てていこうということで、来年度正式な配置をするという形で人事と調整をしている状況でございます。1つは、今こども育成課で療育を一生懸命やっていますけども、学校へきちんと繋ぐということも必要だろうということで、そこら辺でこども育成課のほう人が人を出してくれたような状況になっていて、そこを強化していくという形になるかと思います。

○中村委員

私の認識が不足していると思うんですけども、このスクールソーシャルワーカーの方が、今やはり不登校の生徒がすごく多いじゃないですか。そういう子たちへの関わりが多いと思っていたんですね。療育とその部分とちょっと違うような気はするんですけども、どうでしょうか。

○こども育成課長（熊井康之）

中村委員が言われるとおりでして、小島課長、秋吉部長が言われたように、まずこども育成課から職員を1人振ることによって、学校教育課の内部で仕事の分担を組み替えまして、それぞれ余力が出てきますので、先ほど言われたように、ひきこもり等に主に対応していくような形になっていくと思います。今、どうしても学校教育課が人数が少ないので、こども育成課でこういった方は療育もしますし、そこに指導主事等がひきこもりとか関われない部分についても余力が出てきますので、それも合わせて対応していくような形に、仕事の編成を変えていこうということです。

○中村委員

編成を変えていくことで対応していくと。スクールソーシャルワーカーとしての資質を上げていくということですかね。

○こども育成課長（熊井康之）

そうですね。そこも難しいところもあるんですけども、スクールソーシャルワーカー業務の質自体も上げていくという形になっていきます。

○山内委員

根本は、正規職員としてのスクールソーシャルワーカー配置の予算がないというのが根本になってるんですか。

○教育部長（秋吉恭子）

そうですね。

○山内委員

そうですね。要望としては、ぜひ正規の常勤のスクールソーシャルワーカーを配置してほしいというのが要望ですね。というのは、学校が物すごく助かりますもんね。最初配置されたときのショックは今でも覚えてますけどね。こんな動きしてくれるんやね。今まで学校が本当に抱え込んで、なかなか壁が開かなかったのが、ソーシャルワーカーのベテランの人が入ったら、こんなにいろんな多方面と連携ができて、解決できるんやねというような思いがしたことが何度もあるんで、すぐには難しいでしょうけど、代替でいろいろやっていただけることはとっても感謝しますが、できれば正規の通常職員として配置をお願いしたいというところです。

○教育部長（秋吉恭子）

スクールソーシャルワーカー単独という業務になるかどうかいろいろあるかと思いますが、どちらにしても職員で育てていかないといけないという認識は人事も持っているんですね。資格を持った人をポンと採用することが、非常に処遇を含めて難しいというところもあって、そこら辺は職員としてきちんと育てようという認識に至ったというところはあるんです。どういう業務をやっていくかということは、先ほども言いましたように、いろいろ切り分け難しいところもありますけれども、体制としては強化されるというところで、何とかやっていきたいというふうに思っております。

○中村委員

もう1つ、そこで臨床心理士等の専門家の派遣もなくなるんですか。

○学校教育課長（小島啓一）

この言葉は、ずっと載ってましたけど、実際は直方市に臨床心理士等はいないものですから。ただし、いろんな病院の先生とかいうところの県と連携しながら学校に派遣するという事業はしてます。

○中村委員

以前、うちの子のことなんですけども。今はもう県のほうからでしたけれども、（発達障害支援研究所の）たまやの高橋先生とか小学校のほうに入ってきてくださって、子供の特性に従った環境整備にアドバイスとかをいただいて、飛躍的に子供が伸びた経験がありますので、やっぱりそういうのも進歩してきてると思うんで、できればそういう方々の目も借りて、育てていただけたらなと思います。

○学校教育課長（小島啓一）

その事業は継続的にはあるんです。

○教育長（田岡洋一）

ほか、よろしいですか。

○山内委員

そしたら、書くべきやないやろうか、書かんのかな。

○学校教育課長（小島啓一）

直方市が単独でやってるということじゃなかったの、整理したんですけれども。県の事業にのっかって、派遣はあるんですよ。

○山内委員

直方市の要請に基づいて、県の事業にのっかって、やっていくんでしょ。

○学校教育課長（小島啓一）

やります。

○山内委員

書かなくていいのかな。

○学校教育課長（小島啓一）

そうですね。

○中村委員

できればこういった文言があったほうが、特別支援に関しても関心がある方は、こういった取り組みをしてくださってるんだなという安心感じゃないですけど。

○学校教育課長（小島啓一）

そうですね。市が単独ではないけれど、県を利用してやってますので。

○中村委員

声掛けをしたら、してもらえるのかなって、ここにあれば。

○学校教育課長（小島啓一）

じゃあ、残しましょう。「臨床心理士等専門家の派遣」は残します。

○山内委員

それか事業名を出すか。

○中村委員

県ですね。

○山内委員

福岡県何とか かんとか事業の活用とか。積極的な活用とか。

○学校教育課長（小島啓一）

事業名ですね。

○山内委員

最後に1ついいですか。飛びますけど、11ページの上から4行目の2行。「一方で、発達に支援が必要な子どもが年々増えており、子どもの育てることの難しさを感じる社会になってきています。」僕の取り方が間違ってるかもしれないけど、こうやって書かれると、支援を要する子どもが年々増えてきているから子どもを育てるのが難しく感じるようになったというのは、そんな意図は多分ないんだろうと思うんやけど、そんなふうにとってしまうんじゃないやろうか。伝わりました？ 今言ったの。

○こども育成課長（熊井康之）

感覚的にはわかります。

○山内委員

わかります？ 誤解を生むんじゃないかなとね。

○教育長（田岡洋一）

ここに、「また」という言葉が入ったとしても同じですか。

○山内委員

またやったら区切れますね。このままだったら、支援を要する子どもが増えてきたから育てにくい社会になってきたよねというふうに、書いた人との意図とは真逆の方向に取られてしまう可能性がある。多分そうじゃないと思う。

○こども育成課長（熊井康之）

まさに、そういうことじゃないので、後半の文章は変えるか大幅に削除するか、訂正をかけます。

○澁谷委員

厳しい、厳しいばかり。

○中村委員

個性ですからね。

○教育長（田岡洋一）

教育施策要綱については御意見よろしいですか。

ちょっと時間の関係もありますので、先にいかせていただきますが、報告事項にいつてよろしいでしょうか。

では、平成30年直方市成人式について、文化・スポーツ推進課長お願いします。

○文化・スポーツ推進課長（山部福美）

1月7日、日曜日14時からユメニティ直方で直方市成人式を開催いたしました。教育委員の皆様におかれましては、御臨席いただきありがとうございます。出席は該当者男女合わせて459名中、出席者参加者新成人、男性194名、女性161名、合計355名ということで、全体としまして77.34%の方の新成人の出席がございました。大ホールでの式典、その後、小ホールでの歓談の場ということで、学校の先生たち、恩師の方たちも参加していただいて、懸念されていましたが、大したことなく、できたかなと感じております。新成人も久しぶりに恩師にも会えて、また旧友とも会

えて話ができたり、写真も撮っておりまして、和やかな雰囲気で半日が過ぎたのではないかと考えております。来年度に向けて、いろいろな方々から意見等もいただいておりますので、それを踏まえて来年度考えていきたいと思
います。ありがとうございました。

○中村委員

お疲れさまでした。ありがとうございました。

○教育長（田岡洋一）

次は、上頓野学童クラブ施設落成式についてお願いします。

○こども育成課長（熊井康之）

上頓野施設の落成式の件でお願いがございます。12月20日付で教育委員の皆さんには文書を送らせていただいておりますので、1月27日土曜日の11時から30分程度ですけども、落成式を行います。本当にお時間の都合のつく方だけで構いませんので、できましたら30分ほどおつき合いいただけたらと思います。簡単に状況を言いますと、昨年末、建物自体建ち上がりました。現在、エアコン等の備品を入れてるところであります。来週中には内部は完成することになりますので、27日は、その場で落成式終わった後に、中をちょっと簡単に見ていただければと思っております。繰り返しますけれども、お時間の都合がつきましたら参加の程よろしく願いいたします。以上です。

○教育長（田岡洋一）

次は、東京2020オリンピック・パラリンピック フラッグツアーについて。

○文化・スポーツ推進課長（山部福美）

当日配布で申しわけありません。資料2枚お配りさせていただいております。2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開かれます。それに向けて、競技大会組織委員会が、日本全国機運を上げていこう、盛り上げていこうということで、大会への参画、応援を促すために、フラッグツアーを実施するようになりました。

直方市としまして、オリンピック・パラリンピックのフラッグに触れる機会をつくり出すことで、子どもたちが2020年の大会、オリンピックに向けて、興味を抱いてもらい、身近に感じてもらえるのではないかとこのこ

と。また、夢や希望、目標を持つきっかけにしてもらいたいということで、実施したいと思い、小学校だけに募りまして、5校応募があったんですが、南小学校、中泉小学校、福地小学校の3校を抽せんの上、選ばせていただきました。

最後に直方特別支援学校がございますが、こちらの4カ所をフラッグをもって、直方市文化・スポーツ推進課の職員で回りまして、こちらにあります写真撮影等をして、県にその写真を提出いたします。提出いたしました写真は、最終日であります久留米市でスライドショーとして展示。クロージングセレモニーというのがございますので、そちらで掲載されることになっております。オリンピックが東京である、日本であるというのは、今後なかなかないので、ぜひこの機会にスポーツ振興の上でも、推進していきたいという思いでこれを実施したいと思っております。以上です。1月22日曜日です。朝からずっと、4カ所廻ってまいります。

○教育長（田岡洋一）

次、直鞍一周駅伝について。

○文化・スポーツ推進課長（山部福美）

1月28日、日曜日10時から直方市中央公民館をスタートいたしまして、第72回直鞍一周駅伝競走大会が開催されます。ことしは直方市の当番で、直方市体育協会が主催で、直方市が共催となっております。教育長に出席いただいて、挨拶等いただくようになっております。2市2町で行う予定です。よろしくお願いいたします。

○教育総務課長（安部静子）

追加ですいません。記載漏れでございしますが、前回、福地小学校が平成30年度から給食調理業務が民間に委託になるとお伝えいたしましたが、業者が決まりました。ハーベストネクスト株式会社でございます。直方市には新規参入でございます。今、中村学園とランチサービスで請け負っていただいておりますが、新たにハーベストネクスト株式会社が請け負われることになりました。本社は、横浜市保土ヶ谷区でございます。中央区天神に支社がございまして、福岡支店です。そちらのほうで受けていただくということになりましたので、報告いたします。以上でございます。

○教育長（田岡洋一）

その他にまいります。2月行事について。

○学校教育係長（松本直生）

資料4をごらんください。一番左手に直方市の教育委員会の行事を載せております。2点訂正があります。2月7日水曜日、第2回学力向上検証委員会、教育長出席されます。それと23日金曜日、初任者研修閉講式。これも教育長が出席です。以上です。

○教育長（田岡洋一）

質問ございますか。

それでは一番最後の会議録署名委員の指名について。はい。お願いします。

○教育総務課長（安部静子）

30年1月会議録署名委員を渋谷委員にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○教育長（田岡洋一）

その他ありませんか。

○学校教育課長（小島啓一）

先ほどの教育施策のことですけども、御指摘なかったところは黒に戻して、御指摘あったところだけもう一度朱書きで見ていただくということによろしいですかね。では、指摘なかったものは黒に戻して、指摘のところだけ朱で残します。

○教育長（田岡洋一）

それでは以上で、1月定例教育委員会を終了させていただきます。ありがとうございました。

16時45分閉会

(署名)

直方市教育委員会教育長

田 岡 洋 一

(署名)

直方市教育委員

澁 谷 昌 樹
